〈短歌〉

― 全体講評 ―

今回の応募作品は、題材・表現の両面において、実に多彩な印象がありました。

コロナ禍や世界情勢を反映した作品があり、また日々の暮らしの中からいのちの流露するひとときを掬いあげた作品がありました。短歌という器が捉えたのは、まさに石川啄木のいう「いのちの一秒」と言えるでしょう。

今回は幅広い年齢層から作品が寄せられましたが、長かったコロナ禍の出口が見えてきたこともあるのでしょうか、全体に動作、行動をうたう作が多かったように思います。力強い畑仕事の様子や、子どもたちの遊ぶ姿、県大会や学校生活での若者たちの生き生きとした姿、年配の方々の前向きな暮らしぶりなどが詠まれ、一首一首に感銘を受けつつ拝読しました。

山田　吉郎

【最優秀賞】

美しく老いたきものと幾度も合せ鏡を見入る笑顔で

吉川　美智子

― 講評 ―

美しく老いたいというさりげない述懐が、格調ある端正な歌の調べを伴ってうたわれ、読む者の心に沁みる。共感を覚える人の多い作品であろう。

【優秀賞】

孫たちはくっつき虫をつけあって歓声をあげ学校へ行く

井村　清美

― 講評 ―

子どもたちが明るい声をふりまき登校する姿が生き生きとうたわれている。くっつき虫は衣服につく草の実であろうか。上の句のリズムが楽しく快い。

【優秀賞】

膝までの深き畝間に凍る雪砕きつつ強く匂ふ葱抜く

遠藤　寛

― 講評 ―

冬畑で葱を抜く息づかいと、心のはずむような律動が鮮やかに伝わってくる。一首の言葉の運びと調べ、感覚の冴えもみごとで、熟達の作品である。

【優秀賞】

はじめての県大会での挨拶は暗記で心拍数が上がった

大矢　有朔

― 講評 ―

県大会の挨拶の大役をこなす作者の緊張感と心の高ぶりが生き生きとうたわれている。「暗記で心拍数が上がった」がその高揚感をみごとに伝えている。

【優秀賞】

ビオラ咲き積もる雪への憧れよ君と手つなぐ時を待ってる

髙橋　悠乃

― 講評 ―

「ビオラ咲き積もる雪への憧れよ」という上の句の季節の表現とリズムがみずみずしい。君への思慕の情と融け合い、印象深い一首となっている。

【優秀賞】

アスファルトひな鳥ヒヨと見渡して車の群れに羽毛ふるわす

中田　勇

― 講評 ―

ひな鳥の可憐な様子を詠んだ写生的な一首。下の句の「車の群れに羽毛ふるわす」が、いとおしみと哀感を伴い、作者の深いまなざしを感じさせる。

【優秀賞】

強豪が県大会で魅せる技まるでいかつい大きな虎だ

花野　真輝

― 講評 ―

観客を魅了する強豪の姿を個性的に捉えている。競技の種類は分からないが、「まるでいかつい大きな虎だ」が圧倒的な存在感をみごとに表現している。

〈俳句〉

― 全体講評 ―

コロナ禍も四年目に入ります。マスクの着脱の議論がされ、五月にはインフルエンザ相当の五類にする方向で検討されているようです。句会も吟行も大分行われるようになってきました。人間を含めた自然をじっくり見つめて句作したいものです。今年度は七十三名の方々の応募をいただきました。猫の居る風景やウクライナ戦争の民への想い等を詠んだものもありましたが三分の二は戸外の移ろう自然の中の自分への鋭い視線が感じられる作品でした。私は「俳句は対象の真実を印象として表現する詩である」と考えております。今回も単なる報告ではなく、飛躍や省略の利いた表現で、個性の滲んだ詩の中から秀作を選びました。

来年もまた応募下さいますよう宜しくお願い致します。

梶原　美邦

【最優秀賞】

産土は肺に沁み入る雲雀東風

高橋　桂子

― 講評 ―

生まれた土地に帰って、思い切り深呼吸をする。天上と地上の使者である雲雀が来る頃の硬い東風を吸い込む。胸に幼い頃の懐かしい痛みを感じて微笑む

【優秀賞】

晴天へ駆け登り行く出初式

安齋　行夫

― 講評 ―

江戸の火消が創めた出初式。今は新春に放水や梯子乗り等行われるが、伝統の梯子乗りが圧巻。梯子を素早く登った団員は青空の人となって演技を始める。

【優秀賞】

秋茄子の水やり任せ入院す

金丸　尚

― 講評 ―

茄子は「水で作る」と言われるように、秋茄子は柔らかく瑞々しいものだ。だから土が乾いたなら、水をたっぷり遣って欲しいと家族に頼んで、入院した。

【優秀賞】

桂から淀へ変れば春が行く

髙浪　國勝

― 講評 ―

京都の桂駅のある西京区から電車で染井吉野を眺めながら行くと、淀駅のある伏見区。街を桃色に染めた河津桜も早や葉桜の兆し。春が過ぎてゆくようだ。

【優秀賞】

鉄棒をくるりと回っていわし雲

竹岡　和奏

― 講評 ―

校庭の遊具の鉄棒に両手で掴まり、空に向かって跳ね上がり、眼を瞑り、回転して降りると、心に空の鰯雲のような歓喜の後の不安がちょっぴり残った。

【優秀賞】

伐採の札付けし裸木凜と立つ

中村　文江

― 講評 ―

樹木名と番号の札が取り付けられた裸木。落葉し尽した冬木である。地区で意見や苦情により年々伐採してゆくが、裸木は最期まで毅然と立ち続けている

【優秀賞】

春立てり湯気立ち上ぐる樵の幹

真壁　繁子

― 講評 ―

樵は高さ三〇ｍで太さは一ｍ、樹齢三〇〇年にもなる森の神。森は積雪に強く、保水力に富み、生物を育む。幹に陽が射してくると湯気をたてて春を告げる

【優秀賞】

訛りある友とのんびり初電話

和田　加代子

― 講評 ―

故郷に帰るとスーツを脱いだような気軽さになる。それは訛が昔に連れてゆくからだ。友からの初電話。里訛が長閑な声を醸し、受話器を置くのも忘れた

〈川柳〉

― 全体講評 ―

今年は、成人の句・四十二句、小学生の句・八十五句のご参加をいただきました。

川柳は「生活の詩(うた)」です。自分を見つめて、身近なことを一句にします。大切なのは「上手に作ろうとしない」ことです。自分のほんとうを詠(うた)う、それが一番深いことなのです。また、句に「現代」を映して詠(よ)むのも川柳のいいところです。なるべく現代の表記・表現を心がけてみてください。その一句は、句を受け取る人の心に、すうっと染みていきます。

成人の句では、身近な題材とともに、世界平和への願いや、日本社会の問題点が「川柳の切り口」で表情豊かに示されました。

小学生の句は、国語の教科書で学んだ椋鳩十の「大造じいさんとがん」を題材に、心に残ったところを一句にしてくれました。どの句もみずみずしい感動にあふれていました。

やまぐち　珠美

【最優秀賞】

飢餓絶えぬ地球で絶えぬフードロス

長谷部　誠一

― 講評 ―

地球規模の視野で食料問題を射抜き、「絶えぬ」の繰り返しで警鐘を深く鳴らしています。鋭いまなざしで貫かれている一句です。

【優秀賞】

節電へタマ湯湯婆にして早寝

安藤　美佐子

― 講評 ―

物価の高騰が、庶民生活を重く暗い雲で覆っています。作者はそれに対し、工夫とユーモアで対抗しました。「タマの湯湯婆(ゆたんぽ)」の愛らしい暖かさ。

【優秀賞】

現金を頼りに生きてキャッシュレス

岩下　正文

― 講評 ―

キャッシュレス社会を生きる本音を「頼りに生きて」で鮮やかに描きました。社会の潮流に添いながらも、現金を拝むしたたかさにうなずかされます。

【優秀賞】

失敗も挫折も今は宝物

はな

― 講評 ―

人生のつまずきは苦しくにがく、もう立ち直れないように思えますが、やがてしなやかな強さで前途へ目を向けます。下五が作者を輝かせています。

【優秀賞】

趣味一途余命の灯り赤々と

茂太

― 講評 ―

体力も時間もまだ大丈夫、と思っていた壮年期とはちがい、「余命」をはっきり意識して生きる作者の、なんとアクティブな上五。「赤々と」命燃やす日々。

【特別賞】

春の雪羽音一番とけて去る

店村　陽向

― 講評 ―

残雪の飛び立つ最後の場面を「とけて去る」と表しました。空にとけていく残雪の影と、大造じいさんと残雪の通う心を一句にして晴れやかです。

【特別賞】

英雄は快晴の空輝くよ

林　健斗

― 講評 ―

大造じいさんは「がんの英雄よ」と残雪に呼びかけました。これを読んだ作句者の心に、「快晴の空」が「輝」きました。その嬉しさが伝わってきます。

【特別賞】

ガンとじい英雄たちの広い空

髙柳　陽太

― 講評 ―

残雪を「英雄」とみとめた大造じいさんもまた英雄だ、と考えたとき「広い空」を感じた作句者の思いも澄み渡っています。